

★印がついているのは、10歳以降（一般的な傾向）が中心となるでしょう。しかし、その芽は幼児期から。

## 楽しむ

- ・わくわくしてくる
- ・もっとやりたい！
- ・え？もうおしまい？
- ・はまった！



小さな子は描くことそのものを楽しむ。学年に応じた楽しさの質を考えた。楽しさをうみだすために題材設定、題材との出会いの場面はとても大切。もちろん素材そのものが持つ魅力も大きい。

描いた絵について**共感される実感**は（自己肯定感を育む）楽しさ（喜び）を生み出す。特に幼児期や小学校低学年くらいまでは子どもの絵は子どもの言葉でもあり「あのね、」を受けとめる大人（教師や保護者）の受信はとても重要。学年が進むにつれて直接的な「あのね、」は出てこなくなるが、それは年齢が進もうとも基本的には同じで、今度は級友が「あのね」を理解しあうことが大事になってくる。「子どもは芸術家である。」というとならえ方もあるが、「絵はお話、絵は心の窓」ということを忘れてはならない。中学校以降では真剣に取り組んで得られる「楽しさ・おもしろさ」が大切になってくる。

▼（共感される実感が生まれにくい例）

「先生！できました！」

→「じゃ、そこに置いといて」→「では、ここは、こうしなさい」

## 追求する

- ・こうしたい！
- ・苦労したけどやったなあ！
- ・もっといいものにしたい。★



子どもが課題意識を持って、どうしても実現させたいと思ったとき、子どもの中に「**こうしたい！**」が生まれる。大人の目には、それが「こだわり」と見えたりする。これは、よりよいものを目指す意識のあらわれ。

特に中学生・高校生ではこの「追求」を大事にしたい。何より、彼らにとって題材に取り組むことに「**価値を感じる**」ようにしたい。

追究の結果、その手応えは大きなものとなる。追究があつてこそ達成感が生まれる。

## つなげる

- ・あ、あの方法が使えそう
- ・なるほど、そうだったのか。



学んだことを他に生かしていく力。生きてはたらく力。

「つなげる」力は実は教師にこそ求められる力。

各題材で育んだ心や力を他題材（さらに他教科、他領域、）や他教科、日常生活ともつなげるように工夫したい。

つなげる力を生み出すためにも教育課程の編成は重要である。

授業のあとの「**ふりかえり**」は子ども自らが、自分の学びについて再度考えることでもある。この積み重ねは、子どもが学びをつなげる力を育てていく。

## 比べる

- ・あれ？目が大きすぎたみたい。
- ・ここはどうしたらもっとそっくりになるのかなあ。★



## 選び、決める

- ・どの色にしたらいいな
- ・完成にしようか、どうしよう？



## バランスをとる

- ・この色が強すぎるみたいだ
- ・どうもこの部分が物足りないなあ



## 使う

- ・わっー、きれいな色ができた！
- ・こうすれば怪我をしないのか。
- ・そんな方法があるんだ！



日本では一般的には10歳前後から生まれてくる「ホンモノみたい  
に描いてみたい」という欲求（個人差が、大きい）が生まれてくる。

これに対し、教師として、どう支援していくか、シンプルかつ効果的なのは、「比べる力」を育てることである。

色や形を客観的にとらえるときに頭の中では、形的位置や大きさ、あるいは色や明暗の違いなど様々な比較がなされている。

（長さ、量、明暗などを）「比べる」ことの繰り返しのよって、客観的な表現が出来るようになっていく。

授業の中で「選択意思決定場面」を豊富に用意したい。

それは学びを主体的にし、その子らしさ（その子自身）をつくりだしていくことにつながる。

表現は様々な「価値葛藤」をしていく中で、選び、決める連続によって成り立っているともいえる。

これは、よりよく生きていこうとすることにつながる。

かいた形、構図、色彩などの調和を生み出すためにバランスが大切である。美を追求するとき「統一と変化」や「全体と部分の関係」などが重要であると言われている。これは、言いかえると全体のバランス、調和の問題である。この力は制作途中の作品を「はなれて見る」ことによって引き出しやすい。

（教師）「ちょっと、手をおいて、作品から離れて見てください。」

（子ども）「（離れてみて）あれ、何だか、ここが、大きすぎるみたいだ」「ここを直そう」。教師から指摘されて形を直すのと子ども自らが気づき、自分で直すのとでは、学びの質は大きく違ってくる。「はなれて見る」ただ、それだけのことなのだが、非常に効果的である。絵を作品として意識しだす中学年以降に有効である。

様々な表現技法や色・形・材に関する基礎知識（体験）を自分の表現意図にあわせて使う力。

技法は子どもの中に必要感、必然性があるからこそ、生きてはたらく力となる。

表現技法は教えるのか、育てるのか、慎重に考えていく必要がある。本当に必要であれば子どもは「技」を生み出す、「工夫」をする。なお、教師が押さえておきたい表現技法については、石狩でDVDをつくりましたので、ぜひご覧ください。

## 感じとる

- ・すごくきれい！
- ・なんか、わくわくしてくる色です。
- ・これをつくった人の気持ちや考えを想像したら、それがいかにすごいことであるかがわかりました。
- ・こんなところで美しさを発見！



私たちの生活はさまざまなモノがあふれている。ややもすると消費社会の中に埋没し、流行に流されることもある。価値観を自分の外におきすぎる面もある。

鑑賞や造形活動の豊かな体験の積み重ねが子どもの中の「感じとる」感性を鋭敏にしていく。

また長い年月をかけて受け継がれて来ている価値あるものもある。子どもにそのような価値あるものと出会わせる。そこに鑑賞の役割がある。

このような活動を通して**価値観・美意識を更新**していく。名画や級友の作品だけが鑑賞の対象ではない。

道ばたに咲いている花からも美を感じとる感性も大事にし、育てていきたい。

## 自己理解

- ・私は、この絵が好きだなあ、というの…
- ・僕の絵はそんなよさがあったのか！



鑑賞の中で作品に対する自分の思いを語ることは、結局、自分自身を語っているともいえる。鑑賞を通した「自分なりの見方」も大切にしたい。

対話による鑑賞の授業などでは他者の感想を聞きながら自分の見方、感じ方が深まったり、高まったりしていく。

相互鑑賞の場面で級友の感想を通して新たに**自分の価値を気づく**ことも多い。こうしたことは自己肯定感を育むことにつながっていく。教師の評価や言葉かけも大切である。

図工美術では出す答えは、子どもの数だけある。その実感が自己理解をうながす。

## 他者理解

- ・作者の戦争への怒りを感じました。
- ・このデザインは使う人への優しさがあると気づきました。
- ・みんな違っておもしろい！いろいろな考えがあるんだ。



美術作品は**コミュニケーションのための優れたツール**である。それは他者（作家や級友あるいは地域や文化など）を理解することでもある。

他者を理解する体験の積み重ねは美術のおもしろさを味わうとともに、表現への意欲を生み出す。

鑑賞の副産物として言語能力も高まるということがある。（「対話による鑑賞」などでは、自分が感じたこと、発見したことをどうしても級友に伝えたくてしかたがなくなる。だから伝えるためにことばを考えるようになる。）

## 広げる

- ・この形、○○みたい!
- ・あ、いいこと考えた
- ・もっと違うこと考えてみよう



発想する力とは、自分の感じ方や考えを広げていく力でもある。これは幼児期の「見立て」などはからはじまる。

教師の投げかけや、環境、あるいは鑑賞などによっても（逆に狭めることもある）発想が広がっていく。発想をより豊かに広げるためにも、題材との出会いの場面も工夫したい。

小学校高学年以降の想像の絵やデザインを考えるような授業では、アイディアスケッチを何枚も描いたり、交流したりすることで（子どもの数だけ答えがあるのでおもしろい）子どものもったイメージをさらに広げていきたい。

また、造形遊びのような活動は色や形や材質に対する感じ方や考え方を広げていく。このような体験の積み重ねは中学校で開花する。

## 深める

- ・あ、そうだ、こうしてみよう
- ・もっとかっこよくしたい。
- ・ここを、こうしてみたらどうだろう
- ・構図をもっと工夫してみよう。★



思いついたアイデアをもとに、「これを、もっとよくするには、どうしたらいいだろう?」と、考えを深めていく。

「ひらめき」や「思いつき」を、深めてよりよいものにしようとする。考えを組立てることで、よりよいものが生まれる。

小学校高学年以降では、子どもがぱっと思いついたことを、すぐに、そのまま作品化するのではなく、もっとよい方法はないか、もっとよくなるだろうか、など考えを深めていくような場が重要になってくる。

## 見通す

- ・こういう順序で進めていけばいいんだな
- ・やった! 設計図完成!



完成をイメージしながら、それにそって見通しを持って表現に取り組む。

仕事の「段取り」や「手順」を考えることも見通しを持つことである。

ただし、全ての表現活動が見通しを持ってなされているわけではない。むしろ見通しが中での表現の活動のおもしろさもある。描きながらどんどん変わっていく「つくり、つくりかえる」おもしろさもある。

ここに示した「育みたい力」は、子どもの主体的な意思が働いてこそ成り立つ言葉となっています。ごく普通の授業もこれを参考にしながら、いくつかを取り入れていくと、子どもの姿が変わってくるでしょう。この育みたい力は具体的に授業の中で子どもの姿に出てきますから、そこに着目していれば、授業改善の方向が見えてきます。ただし、この「育みたい力」は国語美術教育のすべてを網羅しているわけではありませんが、大事なことは言っています。